



劇団四季

東日本大震災の夏から、被災地で無料特別公演を展開

1963（昭和38）年の「小さな親切」運動本部発足以来、活動の根幹事業として取り組んできた「小さな親切」実行章の受章者が、

590万人に達しました。

590万人目の受章者は、「劇団四季」（四季株式会社）です。この名前を聞くだけで、「ライオンキング」や「キャッツ」などを観たことを思い出す方も多いでしょう。1953（昭和28）年の創立以来、ずっと日本の演劇界をリードしてきた大劇団です。

贈呈式は、劇団四季の拠点「四季芸術センター」（神奈川県横浜市）で行われました。式の様子を語る前に、劇団四季のファンの方のために内部を少しご紹介。舞台をそのまま再現できる、大稽古場が2つある他、中稽古場が3つ、小稽古場が5つ、さらには研究室、トレーニングジム、音響スタジオ、食堂、医務室等々。衣裳室では、スタッフが「ライオンキング」の衣裳を直して使っている衣裳もあるそうです。トレーニングジムでは、若手の研究生たちが汗を流していました。皆さん、トレーニング中でしたが、

180度開脚をした状態で「こんにちは」と挨拶をしてくださいました。さすがに、笑顔がすてきです。一方、廊下にはひととき目立つ貼り紙が（写真参照）。演劇に対する厳しい姿勢を感じました。

「俺たちは芝居屋だ。外でだって芝居はできる！」

劇団四季は、東日本大震災のあった2011（平成23）年の夏とその翌年、被災地を始めとする東北各地で無料の特別招待公演を実施しました。演目は「ユタと不思議な仲間たち」。そのストーリーは、東京から東北地方に引っ越してきた少年ユタが、地元の子どもたちにいじめられて苦しむ中、精霊の座敷わらしと出会い、生きることにすばらしさと命の大切さに気づく、というものです。今回はこの活動に対し、「小さな親切」実行章を贈らせていただきました。



（右から）四季株式会社吉田社長、佐々木会長、運動本部鈴木代表



被災地域の体育館等で上演された「ユタと不思議な仲間たち」

ですが、浅利先生に一喝されました。「何を言っているんだ。俺たちは芝居屋だろ、外でもいいから、やるんだ」と。

あの日、多くの日本人が驚きと怖れで、身も心も宙を浮いているような感じでしたが、浅利慶太さんは自分たちの本分をしっかりと理解されていたのでしよう。

その後、5月の連休にスタッフは現地に向かい、使える体育館等を探し、学校や教育委員会にお願いをして回りました。さらに現地に負担をかけないよう、機材等も必要最小限に抑え、持参した電源車からの電力供給で賄える舞台を考えました。

「運動を続ける
仕組みを作ること
が大切」

こうして、2011年の7月と8月。岩手県大槌町の吉里吉里中学校を皮切りに13ヶ所27公演、翌年も9ヶ所18回の公演を行いました。小中学校の体育館が主な会場となりましたが、暗幕を張っても劇場のように暗くはなりません。演出面では不都合な点もでてきますが、つらい経験をした子どもたちの心理面を考

えると、かえって良かったというお話でした。

さて、実行章贈呈式は鈴木恒夫・運動本部代表が、感謝の言葉を込めて挨拶を行い、開会となりました。次に、推薦者である氣田直樹・青森県本務事務局長が推薦の言葉を述べました。

「被災地公演ではありませんが、私もボランティアをさせていたいたことがあります。公演を見たあの子どもたちの心からの笑顔が忘れられません。本当に勇気づけられたと思います。ありがとうございます。」

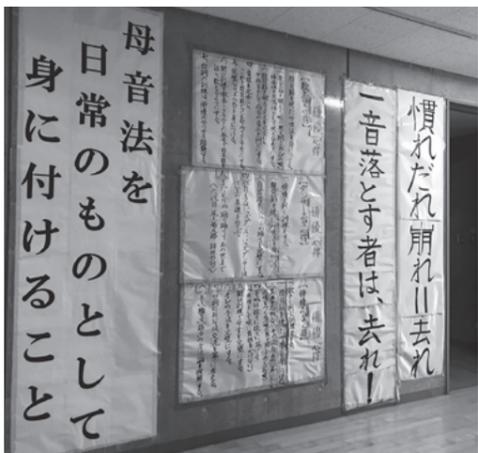
その後、実行章と記念の楯が佐々木会長、並びに吉田智誉樹・同社代

表取締役社長に手渡されました。お二人ともおっしゃっていたのは、演劇と「小さな親切」運動の共通点です。劇団四季では、2008（平成20）年より子どもたちに演劇を通じ感動を届ける「こころの劇場」を主催し、豊かな心の育成を目的とした活動を展開しています。

2017（平成29）年までの10年間で、通算537万人もの子どもたちを劇場に無料招待。演劇を通じ、「生命の大切さ」、「人を思いやる心」、「信じあう喜び」等のメッセージを伝えていきます。

佐々木会長は、「運動を続けること、続けられる仕組みを作ることが大切」

だとおっしゃっていました。その言葉は、「小さな親切」の実践者を発掘し、感謝を伝える親切運動へのエールだと感じました。



廊下に貼られた劇団員の心得の数々

受章の言葉

四季株式会社 代表取締役会長 佐々木典夫

私が「小さな親切」運動を初めて知ったのは、秋田県にいた高校生の頃でした。国の仕組みや社会の仕組みでは、救いきれないことがたくさんありますので、自分ができるところを自分たちでやること、また親切な気持ちを他人に伝えるということで、社会の役に立てるのは素晴らしいことだと感じました。それから50年が経ち、今回、被災地での公演を通じて実行章を頂戴して、自分も少しは役に立てたのかなと感じることができ、本当にうれしく思っています。ありがとうございました。

四季株式会社 代表取締役社長 吉田智誉樹

歴史ある実行章をいただいて、とても感激し、光栄に思っております。ありがとうございました。演劇は、小説や絵画など他の芸術とは異なり、後世に残すことができません。なぜなら、舞台の上だけで演じられる出来事だけでは演劇とは呼べず、劇場の客席にお客様がいてくださり、演じる俳優たちと心の交流を行うことで、初めて成立する芸術だからです。演劇という芸術から、社会性や公共性を切り離すことはできない。その時代の社会や人に寄り添うことが、必ず求められているのです。今回は、演劇の本質をご評価いただいた、ありがたい受章だと思います。

四季株式会社 代表取締役会長

佐々木典夫

贈呈式の後、
佐々木典夫代表取締役会長に
これまでの活動について
お話を伺いました。

佐々木典夫（ささき・のりお）
1947年、秋田県生。1971年、中央
大学文学部卒業。四季株式会社（劇
団四季）入社。2005年、代表取締役
社長に就任。2016年、代表取締役
会長に就任。一般財団法人舞台芸術
センター代表理事を兼任。現在に至る。



「自分たちができることは何か」 東北出身の役者たちが奮起した

— 公演は、各地で大好評だったようですね。

佐々木典夫代表取締役会長（以下佐々木）…ええ。本当にありがたいことだと感じます。「ユタと不思議な仲間たち」は、青森県出身の三浦哲郎さんの同名小説がベースになっていて、東北地方が舞台です。1977（昭和52）年から上演している、この作品があったことは幸いなことでした。題材として、いじめが取り上げられていますが、命の尊さや友情の大切さなどを表現しています。

— 演劇の舞台というのは、お客様の

心にメッセージを届けるものですが、問題はその中身です。「人生は生きるに値する」ということを、常に発信しています。決して、否定したり、嘆いたりするばかりではなく、しっかり生きていく。その源になるエネルギーも伝えていきたいと考えていますので、それを伝えることができただのかなと思います。

— 被災地での公演というのは、普段とは違いますか。

佐々木…やはり圧倒的な現実がそこ



舞台を通じ命の尊さを伝える（釜石市立釜石中学校）

で各地を回れたことをとても喜んでいました。

通常、舞台は裏方のスタッフが作るのですが、あの公演では人数にも限りがありましたので、俳優もいっしょになんでもやりました。そうした経験も、俳優たちを育てたと思います。

— 普段からおお客様と話をするときには、相手と同じ高さの目線でするなど、お客様に寄り添うことを心がけるよう、ミーティングではその都度確認をしていますが、意識せずとも自然とできていたように思います。現場ではお客様に感謝されましたが、私たちの方こそ貴重な体験をさせていただいて感謝したいくらいです。

— 俳優さんたちの反応はいかがでしたか。

佐々木…この公演にあたっては、できるだけ東北出身の俳優を集めてキャストイングを行いました。劇団四季は、地方出身の俳優が多いので、自分たちの故郷を元気にするんだ、という思いは強かったですね。あの時、誰もが「自分たちができることはないか」と考えていました。それが個人ではなく、劇団四季として、芝居

企業、教育委員会、教師。 多方面の協力を得た運動だから、 続けてこられた

— 劇団四季はその他にも多くの社会貢献的な活動をされていますね。

佐々木…本当に幸いなことに、多くの企業や団体、学校や教育委員会の賛同やご協力がありました。みんなでやる運動だから、続けてこられたのです。私たちが行っているのは、

単純に演劇だけです。それが結果として社会貢献になっているのは、こうした支援者の方々の志のおかげだと思います。

— 長年続けてこられて、社会の変化などは感じますか。

佐々木…そうですね。昔は学校に怖い先生がいて怒られることもありましたが、地域の中でも注意してくれる人がいたのですが、今はそういう人がいなくなりました。子どもたちにとっては、これから人生を生きていく上で、何が大切で、何がいけないのかを知るきっかけが少なくなっている。私たちの舞台が、少しでもそれを考える機会になればいいなと思います。実際、子どもたちから「昨日まで、僕はいじめをしていました。でも今日からはやめま

す」というような感想文をいただくこともあります。

— それと、少々心配なのがスマホです。自然豊かな地域でも、子どもたちがスマホでゲームばかりしていて、交流が少なくなったという話を聞きました。また、ただ自分が話したいことを話し、相手に届いているかを配慮しない子どもが増えているそうです。

— 劇団四季では、「母音法」という発声のメソッドを、俳優たちが子どもたちに教える『美しい日本語の話し方教室』という活動も行っています。発声をよくすることで、コミュニケーションの本来の意味を知ってもらおうということですね。わずか40分ほどの授業ですが、吸収力の高い子どもたちですから、話し方は激変しますよ。

— 最後に、「自身が被災地を回られて心に残っていることがあれば教えてください。

佐々木…船に乗って、海上から陸地を見ました。山の上の方に津波に流された船がたくさんあって、起きたことのすさまじさを改めて感じました。これを忘れてはいけません。

— それから、2年目の春に下見に行ったとき、建物の基礎しか残っていないような場所に、桜が見事に咲いていました。その光景は、生命の力、前を見る力を教えてくれたように思います。

— 有意義なお話をありがとうございました。



全国の子ども達から届いた感謝のメッセージ